

佛蘭西書巡覧 25

平山 弓月

このような作品(デュマの『三銃士』や『モンテ＝クリスト伯爵』)は、…、破綻のない筋で読者を最後までひっぱってゆく力をもっている。デュマのこの試みは、それまで二つの異なった存在であった通俗小説と歴史小説を総合させたものということが出来る。

辻 昶



前回に続き、デュマの『モンテ＝クリスト伯爵』についてお話ししましょう。

奸計に嵌められ閉じ込められたイフ島の監獄から脱出し、ファリャ司祭が伝えたモンテ＝クリスト島に隠された財宝を手にした、モンテ＝クリスト伯ことエドモン・ダンテスは、周到な計画のもとに復讐という大海原の航海に旅立ちます。

--- Et maintenant, dit l'homme inconnu, adieu bonté, humanité, reconnaissance... Adieu à tous les sentiments qui épanouissent le cœur !... Je me suis substitué à la Providence pour récompenser les bons... que le Dieu vengeur me cède sa place pour punir les méchants !

「では、」と見知らぬ男は言った。「なまけよ、人道よ、恩義よ、さようなら…人の心を喜ばすすべての感情よ、さようなら！ …私は善人に報ゆるため、神に代わっておこなった…さて、いまこそは復讐の神よ、悪しきものを懲らすため、御身に代わっておこなわしたまえ！」

恩人である船主モレル氏の窮地を救ったときに、ダンテスが復讐に関して本心を語ったのがこの言葉でした。

横恋慕のあげく、奸計により婚約者のメルセデスを奪い、今やモルセール伯爵となったフェルナン。ダンテスの出世を妬み虚偽の密告を謀り、銀行家に成り上がり男爵の爵位を手にしたダンテス。そして、マルセイユの検事代理であった時に自己保身に走り、無実と知りつつダンテスを政治犯に仕立て上げ、検事総長にまで上り詰めたヴィルフォール。ダンテスを嵌めたのは、これらの三人でした。

エドモン・ダンテスが全知全能を絞って企てる「復讐」は、いわゆる「仇討」とは違ってきます。わが国の文芸で、「忠臣蔵」を初めとして数多く扱われる「仇討」では、最後は、仇敵を討ち果たすことで大団円を迎えます。がしかし、モンテ＝クリスト伯の「復讐」劇では、誰一人として彼が殺すことはありません。その代わりに、死よりも苦しい、精神的苦痛に相手を追い込んでゆくのです。

コルシカ生れの船乗りジャコボなどの腹心の部下たちを手に入れたダンテスは、モンテ＝クリスト伯爵、プゾーニ司祭、船乗りシンドバッド、イギリス人実業家、イタリアの貴族などなど、次々と名前と姿を変えて仇敵に迫るのです。

今回は、ダンテスの復讐相手三人のうち、フェルナンへの仕掛けをお話ししましょう。

--- Insensé, dit-il, le jour où j'avais résolu de me venger, de ne pas m'être arraché le cœur.

「おれはばかだった。」と、彼は思った。「復讐しようと思ったとき、心臓をむしり取ってあげばよかったんだ！」

復讐を冷徹に企てるダンテスであっても、心揺れる時があるのです。再会してすぐにエドモン・ダンテスと見抜いた、かつての許嫁メルセデスが、息子アルベールの命乞いにやってきた後、ダンテスの決心は乱れるのです。

彼女の息子は、モンテ＝クリスト伯が彼の父親を侮辱したと誤解し、決闘することになっているのです。しかし、母メルセデスによって真実を知らされたアルベールは、伯爵に詫言を言い決闘を回避します。数々の旧悪を暴露され、妻と息子とを同時に失うはめになったフェルナンは、拳銃での自死を選ぶこととなるのです。

三人の敵はそれぞれ自滅して果てるのです。復讐のすべてを終えたエドモン・ダンテスは全財産を、恩人モレル氏の息子マクシミリアンと、伯爵の機知で死を装おい、危機を脱した恋人ヴァランティエヌに託します。みずからはフェルナンの裏切りによって奴隷とされたジャニナの太守の娘で、伯に救い出され、彼の復讐を手伝い、さらに彼を深く愛するようになったエデに生きる望みを再び見だし、次の言葉を残し、二人で水平線の彼方へと去ってゆくのです。

Attendre et espérer ! 待て、しかして希望せよ！

(仏文に付した訳文は山内義雄訳を借りました)

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)